鹿児島市水辺景観エリア
夜間景観基本計画

目次

1. 本計画について … 3

1-1. 水辺景観エリアの概要 … 4

1-2. 本計画の目的と位置づけ … 5

2. 現状調査 … 6

2-1. 調査概要 … 7

2-2. 調査結果

（1）平田橋〜高見橋（市民広場） … 8

（2）高見橋〜南洲橋（維新ふるさとの道） … 10

（3）南洲橋〜高麗橋（維新ふるさとの道） … 12

（4）高麗橋〜甲突橋（維新ドラマの道） … 14

（5）南洲橋〜甲突橋（甲突川右岸緑地） … 16

2-3. 現状調査から見えてきた課題点 … 17

3. 大切にすべき光のルール … 18

3-1. 心地よい陰影 … 20

3-2. まちなみの明るさ感 … 21

3-3. グレアフリー … 22

3-4. 適切な色温度 … 23

3-5. 高い演色性 … 24

3-6. 光害への配慮 … 25

3-7. 光のオペレーション … 26

4. より魅力的な夜間景観のために … 27

4-1. 水辺景観エリアの夜景のキーワード … 28

4-2. 水辺景観エリアの夜間景観形成の目標 … 32

5. 整備イメージ … 33

5-1. 整備の基本的な考え方 … 34

5-2.「大切にすべき光のルール」の適用 … 36

5-3. 整備イメージ作成箇所 … 37

（1）川沿いの歩道 … 38

（2）市民広場 … 40

（3）維新ふるさとの道① … 42

（4）維新ふるさとの道② … 44

（5）維新ふるさとの道③ … 46

（6）維新ふるさとの道④ … 48

（7）維新ドラマの道 … 50

（8）右岸緑地① … 52

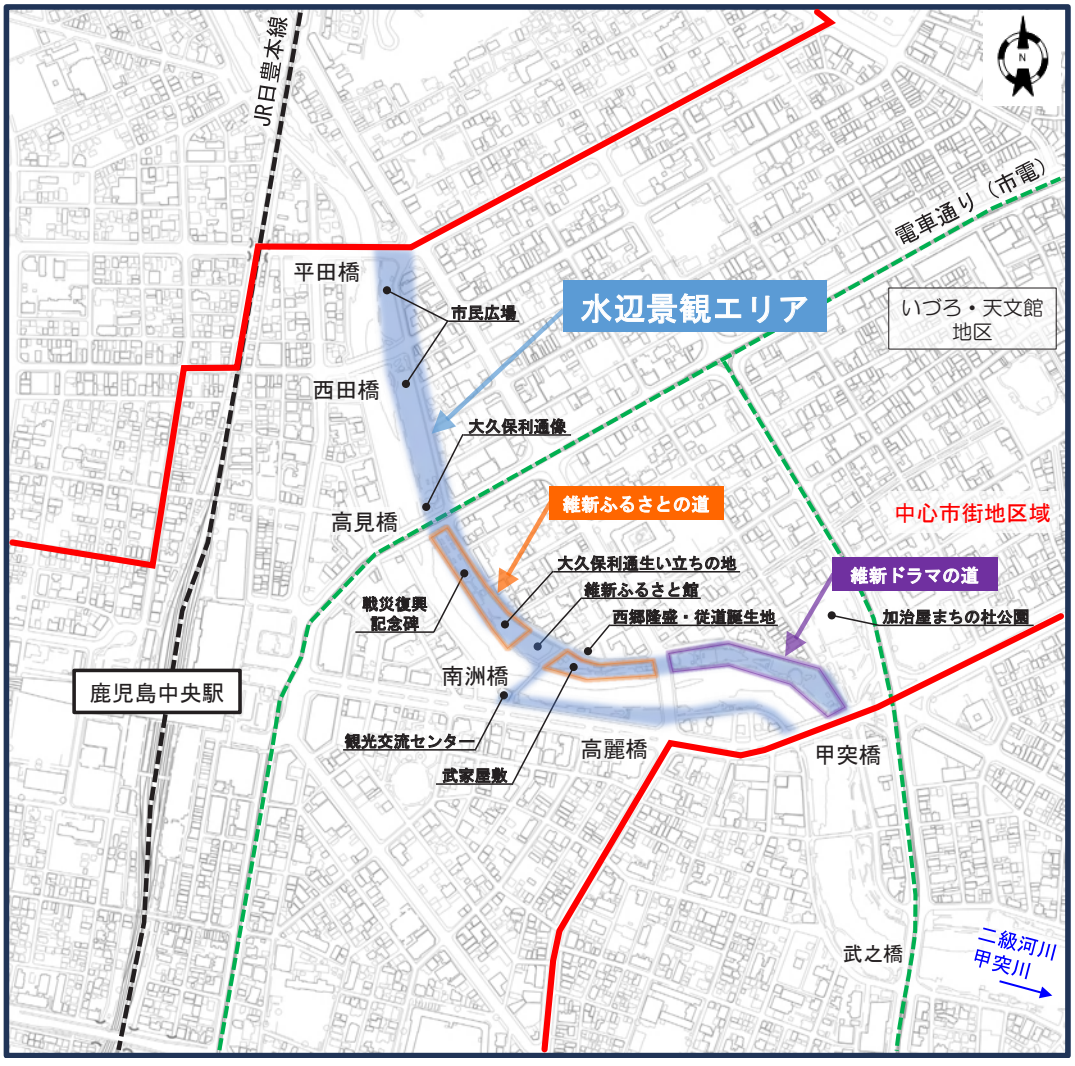
（9）右岸緑地② … 54

1．本計画について

1-1. 水辺景観エリアの概要

水辺景観エリア夜間景観基本計画の対象区域は、中心市街地内の甲突川沿い（平田橋～甲突橋間）を基本とした範囲とする。なお、今後の水辺景観エリアの整備状況を踏まえるとともに、令和7年計画策定の「歴史景観エリア」や今後計画策定予定の「市街地景観エリア」等とのつながりにも配慮しながら、今後必要に応じて対象区域の見直しを検討する。
水辺景観エリアは、鹿児島市の中心市街地である「鹿児島中央駅地区」と「いづろ・天文館地区」の間に位置し、甲突川左岸緑地及び甲突川右岸緑地を含む区域である。甲突川沿いの遊歩道からは桜島を望むことができ、春には桜並木が咲き誇るなど、鹿児島市の代表的な都市景観を形成している。
左岸及び右岸緑地では、散歩やジョギングを愉しむ人々や遊具で遊ぶこどもたちの姿が見られ、市民の日常的な憩いと交流の場となっている。さらに、平田橋から高見橋の間では、春と秋に苗木や盆栽などを販売する「木市」などのイベントが開催され、多くの市民に親しまれている。
高見橋から高麗橋の間及びその周辺には、「西郷隆盛・従道誕生地」や「大久保利通生い立ちの地」など歴史的資源が点在しているほか、本市では、平成6年の維新ふるさと館の開館をはじめとして、南洲橋の整備や歴史ロード「維新ふるさとの道」「維新ドラマの道」の整備、観光交流センターの開設など、歴史資源と水辺空間、観光・交流機能が一体となったまちづくりを進めてきたところであり、歴史散策や憩いの場としての空間形成が図られている。

また、歴史ある千本桜を再生し、市民の憩いの場としての機能を継承しつつ、新たな桜の名所として甲突川河畔の魅力をさらに高めるとともに、緑地空間の充実を含めた環境整備を進めることにより、年間を通じたにぎわい空間を創出し、まち全体の生活向上へと繋げることを目的として、「甲突川千本桜再生プロジェクト」に取り組むなど、良好な景観形成を図っているところである。



【図】水辺景観エリアの区域図

1-2. 本計画の目的と位置づけ

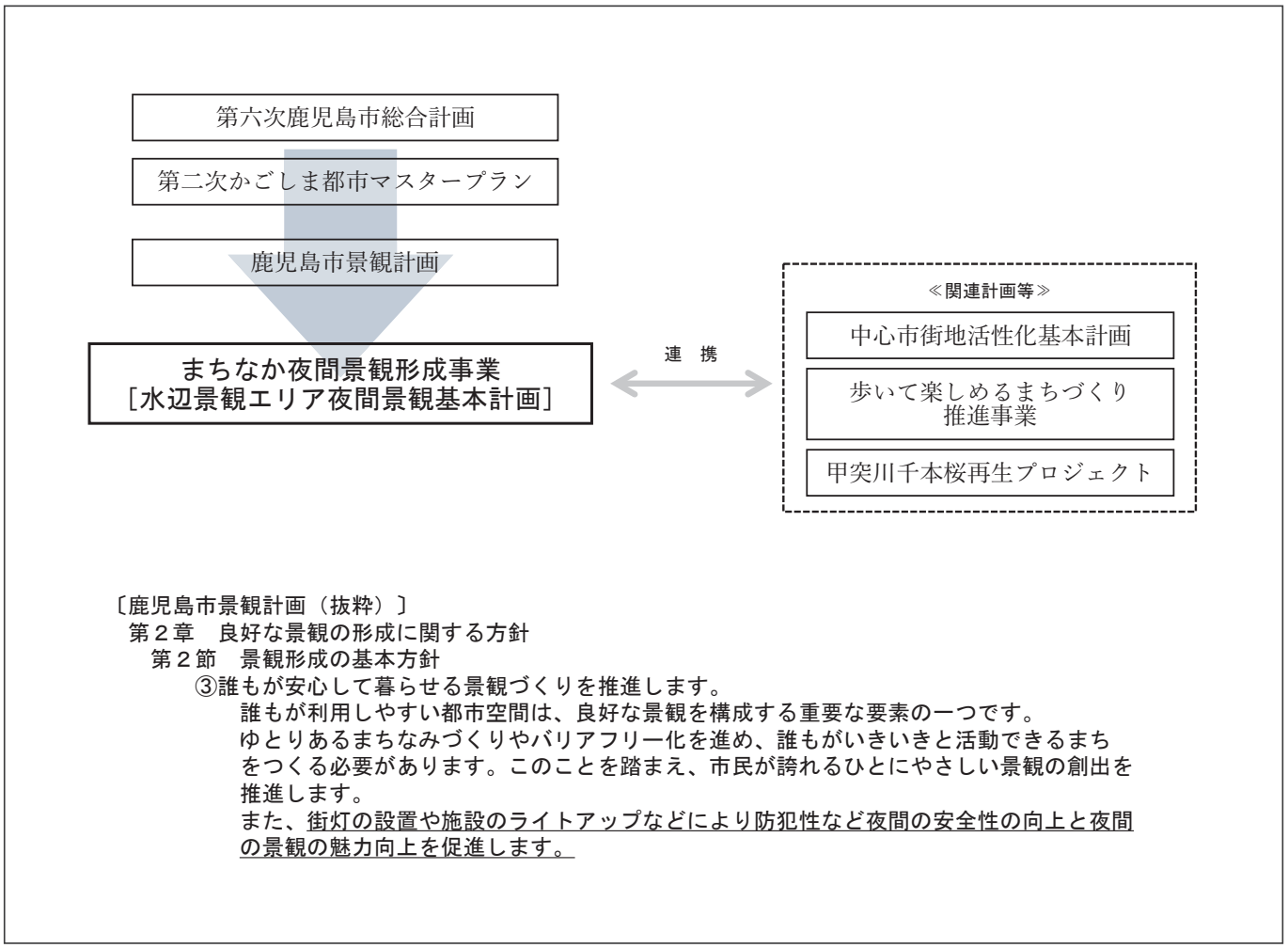
国連の持続可能な開発目標（SDGs）は、世界共通の目標として、17 のゴールと 169 のターゲットが掲げられており、本計画では、関連の深い４つのゴールの達成に向けて取り組みます。



【図】SDGs との関連

これまで本市においては、エリアごとの夜間景観に関する計画がなかったため、各所管部局による公共施設等のライトアップ等は局所的な整備に留まっており、面的な連続性や夜間の回遊性が乏しく、夜の観光資源として十分に活かしきれていない状況である。
水辺景観エリアは、歴史に想いを馳せながら散策を楽しめる水辺空間として親しまれており、こうした魅力ある空間は、昼間だけではなく、夜間においても更なる魅力の向上が期待できる重要なエリアである。
また、夜間景観の形成にあたっては、周辺地域を含む昼間の景観にも配慮した一体的な景観形成を図ることが重要である。
本計画は、水辺景観エリアを対象として、市民参加による愛着と誇りが持てる夜間景観の形成及び、観光客を含む新たなにぎわい創出を図るためのライトアップや街路灯の整備などに関する夜間景観の基本計画として定めるものである。

まちなか夜間景観形成事業は、第六次鹿児島市総合計画や第二次かごしま都市マスタープラン、鹿児島市景観計画を上位計画とし、実施するものである。
また、その他の関連事業として、にぎわいあふれるまちづくりや回遊性の向上などを図るための中心市街地活性化基本計画、歩いて楽しめるまちづくり推進事業、及び甲突川千本桜再生プロジェクトとも連携しながら実施するものである。



〔鹿児島市景観計画（抜粋）〕
第２章　良好な景観の形成に関する方針
第２節　景観形成の基本方針
③誰もが安心して暮らせる景観づくりを推進します。
誰もが利用しやすい都市空間は、良好な景観を構成する重要な要素の一つです。
ゆとりあるまちなみづくりやバリアフリー化を進め、誰もがいきいきと活動できるまちをつくる必要があります。このことを踏まえ、市民が誇れるひとにやさしい景観の創出を推進します。
また、街灯の設置や施設のライトアップなどにより防犯性など夜間の安全性の向上と夜間の景観の魅力向上を促進します。

【図】計画の位置づけ

２．現状調査

2-1. 調査概要

水辺景観エリアの夜間の光環境を把握するため、歩行空間を対象として、光環境（照度、色温度等）の測定等を行い、エリア内の回遊性や快適性の現状を調査する。
対象範囲のなかで代表的な画角から各所の昼間と夜間の様子を撮影し、昼夜での印象の変化を比較するとともに、それぞれの地点の光環境について、夜間の路面照度や代表的な照明の色温度をまとめ、分析する。

・使用機材の例



照度計

照度　lx
色温度　K
演色性　Ra



輝度計

輝度　cd/m²

照度測定時の注意





距離計

・用語について

■照度…単位面積当たりに入射する光束の量を表す数値であり、光によって照らされる面の明るさの程度を表す。
単位には Lx(ルクス) が用いられる。
JIS においては、住宅地の通路や公園・広場で 1 ～ 10Lx 程度、市街地の通路で 5 ～ 30Lx 程度が参照値である。
ただ、十分な照度であることだけが歩きやすい光環境の絶対条件というわけではない。
例えば、満月の夜は月明かりで 0.2Lx…といったように、夜間の心地よさは周辺の雰囲気や明るさ感にも依存する。

■色温度…光源固有の色味を表す数値のこと。色温度が低いほど暖色系の光、色温度が高いほど寒色系の光を示す。
単位には K(ケルビン) が用いられる。
ロウソクの炎は 1900K 程度、日中の自然光は 5500 ～ 7500K 程度、晴天の青空の色は 10000K 程度。

■輝度…ある特定の方向に対する光の強さ (面積あたりの光度) を表す数値であり、
人の目に飛び込んでくる明るさや光の強さを指す言葉として用いる。
単位には cd/m2(カンデラ / 平方メートル) が用いられる。

■グレア…不要かつ不快な眩しさのこと。

■演色性…光源による色の見え方 (再現性) の良し悪しを評価する指標のこと。
単位には Ra(アールエー) が用いられ、基準光で見た色を Ra100（満点）として、それに対する忠実さを数値化する。

（1）平田橋～高見橋 (市民広場)

甲突川左岸緑地の上流側では、川沿いに続く歩道の横で、木々に囲まれた市民広場が広がる。春と秋には木市の会場になるなど、開放的な広さが活かされたイベントも行われている。
川沿いの歩道を含む護岸や橋梁は、過去の豪雨災害の折に行われた整備によって、歩きやすい親水空間となっている。
ただ、夜になると、広場を考慮した照明は設けられておらず、川沿いの歩行空間においては、街路灯が非常にまぶしい印象を受ける。

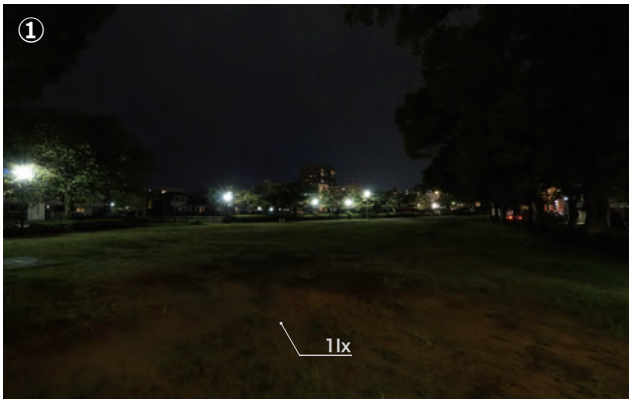


昼間の状況

夜間の状況



広々とした芝生の広場。



光源が直接見える街路灯がまぶしい。グレアによる周囲との対比が強く、広場の地面は実際の照度の値より暗く感じる。常緑樹の豊かな緑も、影となって壁のように感じられる。



川沿いには木陰の滞留空間が設けられている。川に沿って散歩する人々の休憩場所としても心地よい。



ベンチのあるところは街路灯の光も届いておらず、暗がりとなっていて、歩行時には不安を感じる。



護岸に現れる階段状の広場。親水空間として非常に魅力的に感じられる。



夜、西田橋から眺めると、川面や護岸は完全に闇となっており、階段や半円形の広場があることはまったくわからない。

（1）平田橋～高見橋 (市民広場)



昼間の状況



甲突川に沿って続いていく歩道。舗装も歩きやすく、街路樹の桜と水辺の景観を楽しみながら散歩することができる。



ライオン像を抜けた先に広がっている整備された空間。東屋や藤棚にはテーブルとベンチが設えられ、憩える場所になっている。



高見橋に面して建つ大久保利通像。鹿児島中央駅に向かう動線の顔となっている。

夜間の状況



歩道沿いの街路灯のグレアにより、光が届いていないところの暗さが余計に際立っている。西田橋のライトアップは景色のフォーカルポイントとして効果的である。



夜には周辺の街路灯からの光が少し届くのみで、東屋や藤棚の存在感はなく、特長のない暗い公園という印象。



大久保利通像は地面からだけでなく多角的に配置された照明でバランスよく照らされ、ふさわしい存在感を湛えていた。横の噴水とライオン像も光を受けていて、奥行きを感じさせる。

（2）高見橋～南洲橋（維新ふるさとの道）

高見橋は、鹿児島中央駅地区といづろ・天文館地区を結ぶ道路として交通量も人通りも多い。その左右に続く川沿いの道へと人々を出迎える空間として、緑地の心地よい雰囲気が夜間にも周囲に表出していくことが望ましい。
高見橋から維新ふるさと館までは、桜を含む樹林群の間を抜けていく緑豊かな散策路が続く。



昼間の状況



高見橋の南側は、維新ふるさと館へと続く緑地帯の入口として、人々を迎え入れるような開けた空間となっている。



交通量の多い県道から少し緑地帯に入ると、木々に囲まれた落ち着きを感じることができる。



戦災復興記念碑を囲む円形広場。記念碑の周囲にはライトアップ用のスポットライトが設置されている。

夜間の状況



夜になると、屋台の明かりが灯り、そちらにひきこまれるようなにぎわい感が生まれている。

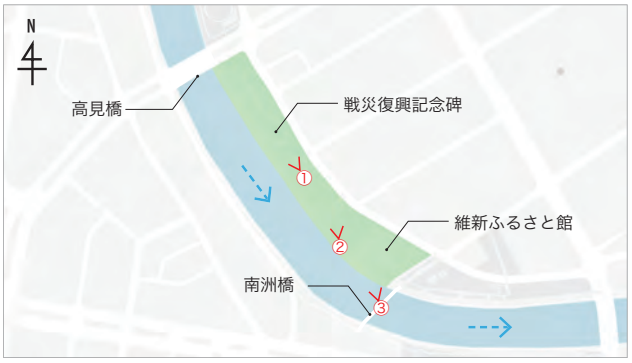


昼間は心地よく感じられた樹木が影となって、頭上が覆われるように暗い。屋台から離れたところは暗い空間となっている。



昼には経年劣化を懸念したが、ライトアップの点灯状態は良く、グレアもなく記念碑がやわらかく照らされている。記念碑以外の周囲は暗いため、滞留したい空間にはなっていない。

（2）高見橋～南洲橋（維新ふるさとの道）



昼間の状況



豊かな緑を感じながら散歩ができる散策路。木々の合間には、ところどころでベンチが置かれている。



維新ふるさと館から続く川沿いの歩道。



南洲橋から維新ふるさと館を眺める。観光の目的地としても訪れる人々が多い。

夜間の状況



川沿いに街路灯があるものの、十分な光は届いていない。樹木が影になっており、豊かな緑を感じられたはずの空間が闇に変わっていて、昼間のような心地よさは感じにくい。



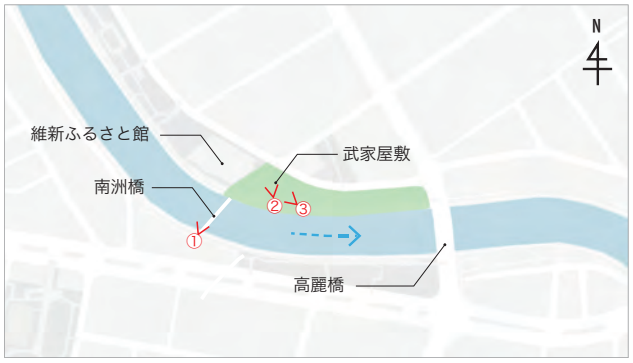
ポールの上に、クスノキを広範に照らす投光器が設置されている。頭上の明るさ感を効果的に演出しており、離れたところからも樹木の緑を感じることができる。



護岸の照明や高見橋のライトアップが整備されており、水面の景色をつくっている。街路灯の光源が統一されていないため、ふるさと館の建物を照らす光の色にまとまりがない。

（3）南洲橋～高麗橋（維新ふるさとの道）

南洲橋と維新ふるさと館を境に、下流側の緑地帯では、樹林が高見橋側よりも開けた印象となり、桜の合間に史跡を紹介するモニュメントが並ぶ明るい印象の散策路となる。
川面を見通せる視点場も増え、護岸や橋梁のライトアップが印象的な景色となっている。



昼間の状況



ナポリ通りから維新ふるさと館を訪れる人々を出迎える南洲橋。



南洲橋から下流側では、歴史や史跡を解説する看板が並んでいたり、武家屋敷の建物が公開されていたりと、歴史に思いを馳せながら散策ができる。



川沿いに開けて続く歩道と、史跡の間に入っていく散策路、双方を楽しむことができる。

夜間の状況



落ち着いた明るさのフットライトが設けられており、橋詰の灯篭状の明かりとともに、電球色で統一されたあたたかみのあるアプローチが演出されている。

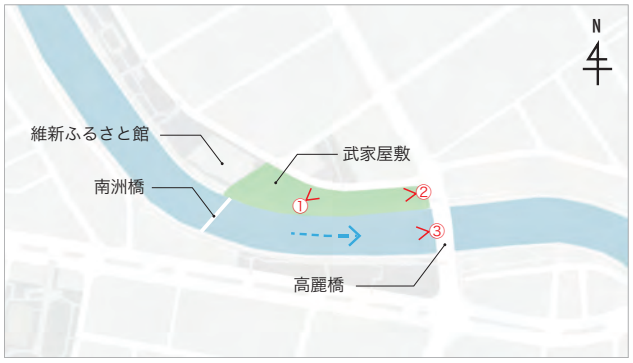


看板は電球色の間接照明が仕込まれていて夜でも景観要素になっていたが、武家屋敷は暗く、その存在はわからない。



維新ふるさとの道では、川沿いの街路灯の光源が電球色で選定されていることに配慮を感じるが、むき出しの光源が依然としてまぶしい。グレアによる輝度の対比で、周囲は暗い印象。

（3）南洲橋～高麗橋（維新ふるさとの道）



昼間の状況



遊び心のあるモニュメントが点在し、歩く人を楽しませるような散策路。



維新ふるさとの道、高麗橋側の入口。武家屋敷を思わせる門があり、その奥に入ってみたいと思わせる空間となっている。



高麗橋から上流のほうを眺める。甲突川の水面と空が広々と感じられて心地よい景観。

夜間の状況



一部のモニュメントやベンチが電球色であたたかく照らされているが、周囲の樹木や、照らされていない石碑などが暗がりとなっており、散策路全体としてはアンバランスな印象。



門は間接光でやわらかく照らされており、夜間にも印象的に視線を惹きつけている。周囲にも連続性のある明るさが計画されることで、より空間の広がりを感じられるようになる。



護岸に整備されている照明が点々と水面に映り込み、その先にライトアップされた南洲橋と、借景としての中央駅が見える。美しい水辺の景観だが、街路灯のまぶしさが遠景でも際立つ。

（4）高麗橋～甲突橋（維新ドラマの道）

高麗橋をはさんで下流側は、散策路というよりも、芝生のところどころに遊具や銅像や東屋が並ぶ、公園のような印象が強くなる。川沿いの歩道は引き続き整備されていて、水辺の景観を楽しみながら歩きやすい。
護岸の景観照明は高麗橋上流側までとなっており、夜には照明の色温度も異なる。



昼間の状況



高麗橋の東側。車の多いみゆき通りをはさんで散策路が続く。偉人の顔をモチーフにしたアートが人目を引く。



整備された歩道と、水辺を楽しみながら歩いていくことができる。

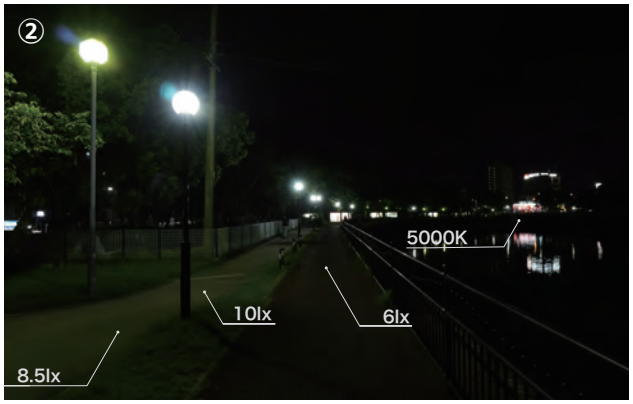


遊具や銅像に混じって、維新のさまざまな場面をアートにした電光掲示板が並ぶ。

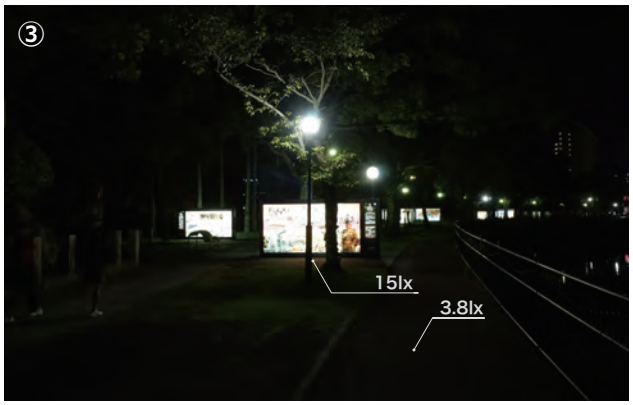
夜間の状況



昼間に目立っていたアートは、埋め込み照明が不点灯で、暗がりになり全く見えない。非常に暗い印象を受ける空間だが、路面照度の数値は周囲から届く光で意外と担保されている。



川沿いの街路灯の光源は、高麗橋を越えてまた昼白色に戻る。まぶしいだけでなく、白々しく冷たい印象の歩道が続く。



維新ドラマの電光掲示板は、適切な輝度感で、散策路の奥行きや明るさ感を演出している。ただ、他に光っている景観要素がまぶしい街路灯のみで、心地よい歩行空間とは言い難い。

（4）高麗橋～甲突橋（維新ドラマの道）



昼間の状況



川幅で開けた視界の先に、日によっては桜島を臨むことができる。鹿児島ならではの川沿いの景観。



緑地帯側には東屋やベンチが点在し、公園のような空間が続く。



甲突橋から緑地帯への入口。広々と緑が感じられる。春には桜の木々も楽しめる。

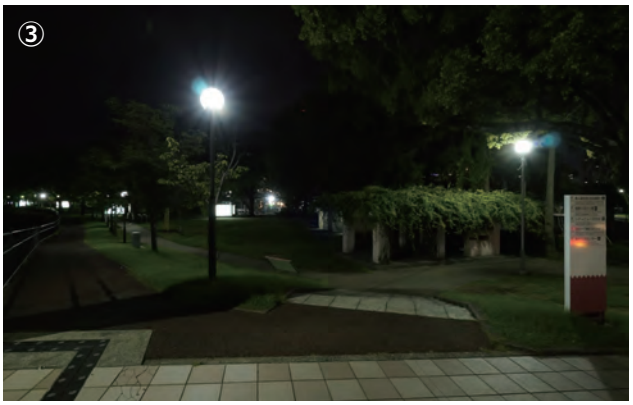
夜間の状況



護岸に景観照明が設けられていた上流側に対し、高麗橋から下流側では、川沿いに連なる街路灯のみが点々と水面に映り込む。光源のまぶしさと相まって、冷たく無機質な印象。



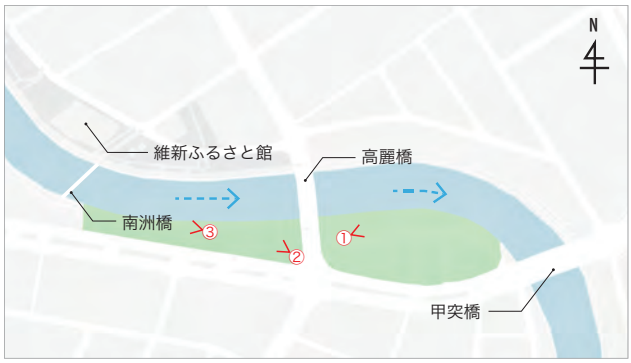
電光掲示板も途切れ、歩行の頼りになるような明るさ感や光だまりもない。東屋が暗がりになっていて、不安を強く感じる。



ナポリ通りの車道照明から明かりが届いているが、道の奥は暗く、木々の存在も感じられず、川沿いに歩いていきたいと思える雰囲気にはなっていない。暗がりへの不安を強く感じる。

（5）南洲橋～甲突橋（甲突川右岸緑地）

ナポリ通りと甲突川の間に広がる右岸緑地は、幹線道路沿いの公開空地として、憩いの場になっている。
昼間は部活動の学生やランニングをしている人の姿を見かけるが、夜には人影もなく、不安を感じるような暗さで、緑地帯が闇に沈んでいる。川沿いの景観を、影になった樹木が壁のように遮っており、ナポリ通り側から水辺の存在を感じることはできない。



昼間の状況



右岸では、左岸のように川に沿って続く歩道がないかわりに、川に面した位置にところどころベンチが置かれている。



主要な道路であるナポリ通りに面しながらも、広々とした緑地が確保されている憩いの空間。



甲突川を臨む開放的なテラス。テーブルも置かれ、水辺の心地よさを楽しむことができる。

夜間の状況



緑地の中を抜けていく散策路に沿って、街路灯は設置されているものの、配置もまばらで、樹木の影にもなり、緑地帯の奥はどこも暗く全貌がわからない。不安を感じる。



ナポリ通りの歩道にも照明がないため、芝生内も歩行空間も非常に暗い。緑地のところどころに街路灯が立つが、光源がまぶしく、樹木は影になっていて、さらに暗い印象を与えている。

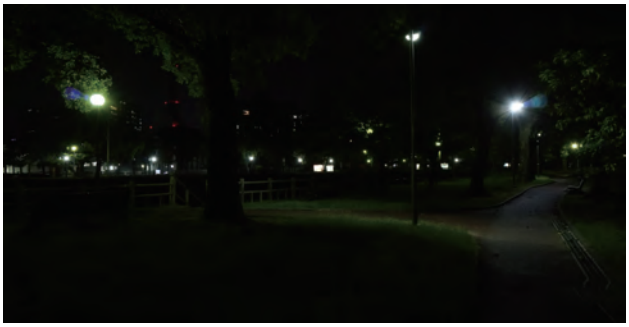


ポールの照明は、光源が白色で冷たい印象。歩行者の通るところを照らしているが、テーブルまわりには光が届いておらず、周囲は非常に暗い。滞留空間としてバランスが悪く感じる。

2-3. 現状調査から見えてきた課題点

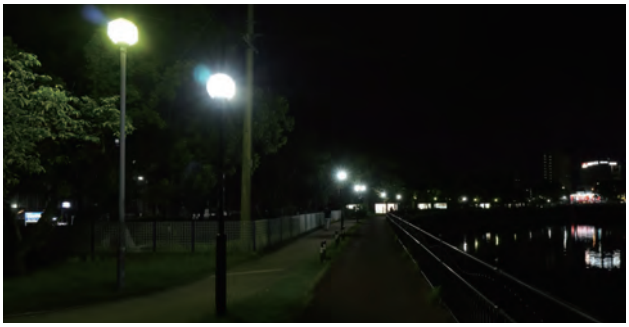
・歩行に不安を感じる暗さ

…路面照度の数値は足りていても、視界における明るさ感に欠けていて暗く感じたり、
物陰に人が居てもわからないような暗がりが歩道の隣にあるなど、散策に不安を覚える場所が多い。

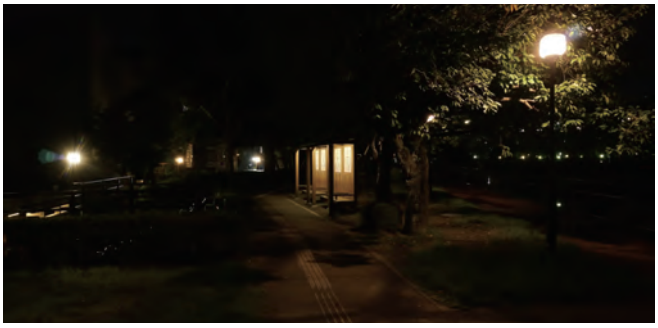
・不快なまぶしさ

…光源がむき出しになっている仕様の街路灯が多く用いられており、目に優しい快適な視環境が
損なわれているとともに、過剰なまぶしさとの対比によって、周囲がより暗く感じられてしまう。

・活かされていない水辺・憩いの空間

…昼間は心地よい滞留空間となっている場所が、夜には周囲の暗さとのアンバランスな印象によって
近寄りがたい空間となっている。川面のうるおいも夜には感じにくく、もったいない印象を受ける。




３．大切にすべき光のルール

心地よく魅力的なまちなかの光環境をつくるために、
まずは技術的な視点から光の特徴を理解することが重要である。
そこで、夜間景観を検討するにあたり配慮すべき基本的原則を7項目にまとめ、
「大切にすべき光のルール」として設定する。

大切にすべき光のルール

1. 心地よい陰影　- 必要十分な光で、美しい陰影を大切に -

2. まちなみの明るさ感　- まちなみを惹きたて、印象付ける -

3. グレアフリー　- 不快なまぶしさを取り除き、目に優しい景色をつくる -

4. 適切な色温度　- あたたかみのある明かりを用いる -

5. 高い演色性　- まちの表情を夜にも豊かに見せる -

6. 光害への配慮　- 自然の暗さを尊重し、環境や夜空を守る -

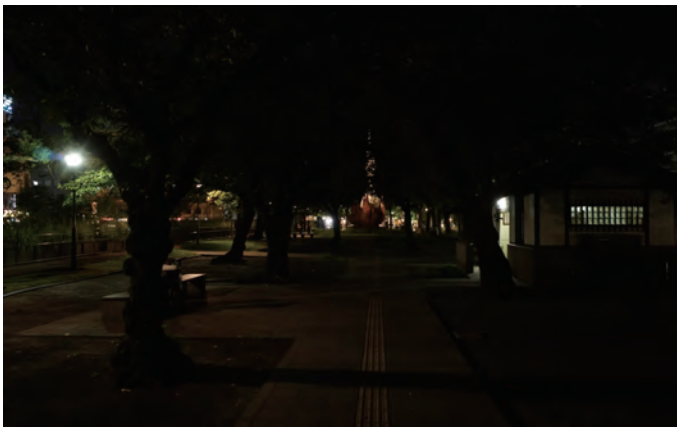
7. 光のオペレーション　- 時間帯や季節に応じて光が変化する -

1. 心地よい陰影

必要十分な光で、美しい陰影を大切に

周囲が暗すぎる光環境は、安全・安心という都市照明に求められる第一の機能を満たしていない点で非常に問題だが、なにもかもが煌々と照らし出された明るすぎる光環境も、情緒や魅力に欠けた空間となり、夜の安らぎを人々から奪ってしまう。
美しい景色には主役と背景のバランスが重要であり、夜景に置き換えるとそれは光と影の関係となる。人々が集う場には賑わいと安心感をもたらす明るさが必要だが、憩いの空間には落ち着いた暗さが求められるといったように、機能的に必要な場所と景観要素に対し、それぞれに最適な光をきめ細やかに与えていくことが重要である。
場所と用途に合わせて照明を配置することで、美しい陰影に富んだ魅力的な景色ができる。





照明の光が届いていない範囲が多く、非常に暗く感じられる歩行空間。樹木によって光が遮られているところもある。



歩行空間や周囲の建物に適切な明るさがあり、樹木の影も自然に感じられる。

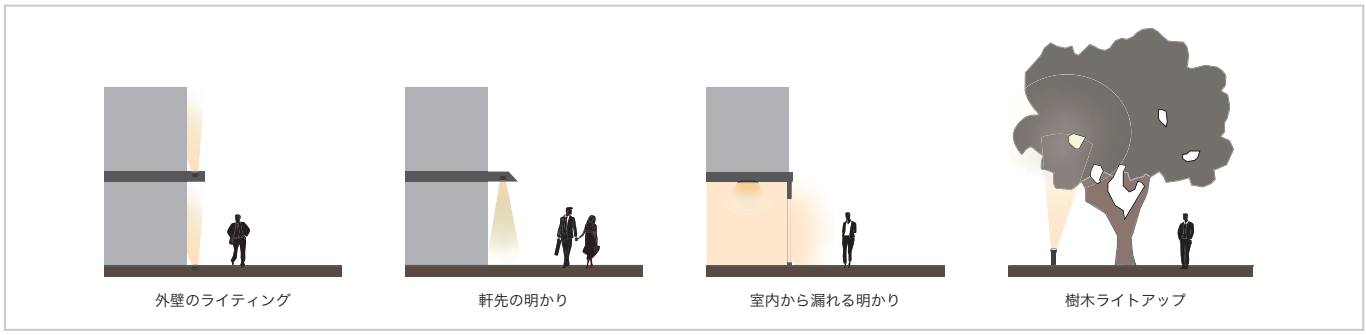


リズム感のある光のバランスにより、軸線の先にある景色が際立つ。

2. まちなみの明るさ感

まちなみを惹きたて、印象付ける

わたしたちの感じる「明るさ感」や「快適性」は，視界に占める発光面積に影響されている。特に鉛直面（壁面などの地面に対して垂直な面）は視界に入りやすいので、建物のファサードや樹木などを照らすと、地面を照らすよりも効果的に空間の明るさ感をつくることができる。
視線を集めるポイントに明るさをつくることで、暗闇に隠れていた空間がめざめ、安心感と奥行きを感じさせる印象的な夜間景観が形成されていく。
また、路面の照度を得るためにむやみに照明を増やすのではなく、鉛直面を活用して明るさ感を増すことを意図した計画は、結果として少ないエネルギーで快適な光環境をつくることにつながる。



鉛直面の明るさを与えるための照明手法の例



手すりの照明に加えて石垣もライトアップし、鉛直面の明るさをまちなみに与えた例。心地よく歩ける歩行空間が続く。

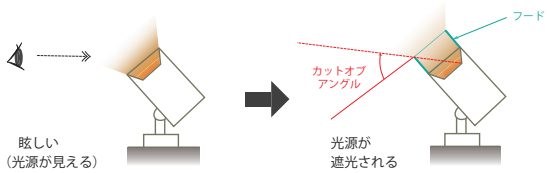


建物や樹木のライトアップにより、明るさ感が形成されている例。路面を照らす照明が少なくても、不安感を感じずに空間の奥行きを把握することができる。

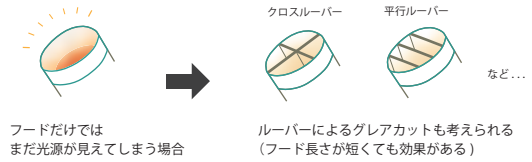
3. グレアフリー

不快なまぶしさを取り除き、目に優しい景色をつくる

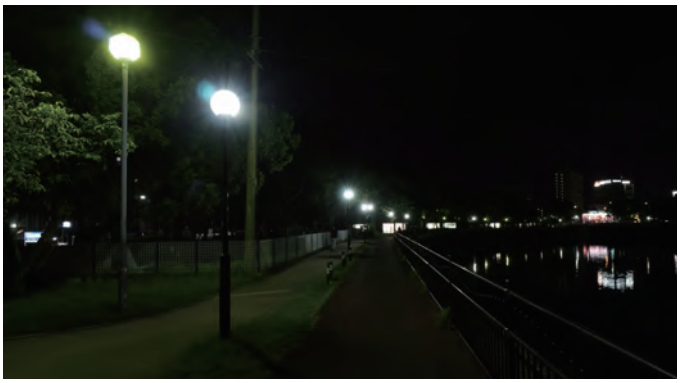
グレアとは、不要かつ不快なまぶしさのことである。人間の目は視界の中で明るいところに注意が向く特性があるため、夜景を楽しみたい場所にグレアがあると周囲の邪魔になり、美しい景観を台無しにしてしまう。まちなみにおけるグレアの代表格は、光源がギラギラと過剰な光を放っていたり、遮光をおろそかにしている照明器具である。
目を刺すようなまぶしさの照明器具が目立つことのないように、まずは都市照明の品質の基本として、グレアに対する評価を行うことが必要である。
照明器具の照射方向に注意したり、フードやルーバーによって光源が適切に遮光された照明器具を選ぶことで、グレアの軽減が可能となる。また、拡散光型（器具自体が柔らかく発光する）の器具の場合は、表面輝度をきちんと管理することが求められる。

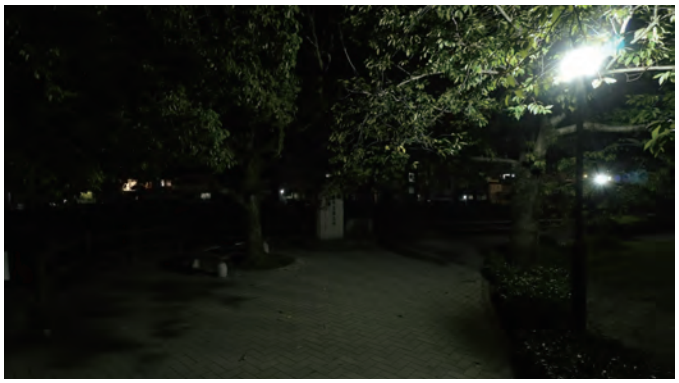


フードによるグレアカットの考え方



ルーバーによるグレアカットの考え方





グレアがひどい照明がある景色。ポール灯において、グレアカットや輝度への配慮がなされていないところが目立つ。



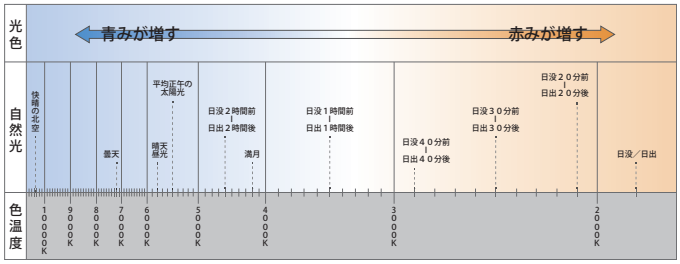


グレアに配慮された光環境の例。歩いていく道の先を遠くまで見通すことができ、周囲の景観が心地よく感じられる。

4. 適切な色温度

あたたかみのある明かりを用いる

光源は固有の色味をもっていて、それを表す数値を色温度という。昼間の太陽光に近い青白色や白色の光は色温度が高く、白熱電球に近いオレンジ色の光は色温度が低い。
一般的に、人は色温度の高い光の下では高揚感や緊張感を感じて活動的になり、色温度の低い光の下では、暖炉や焚火に集うような安らぎを感じてリラックスすると言われている。空間の印象を大きく左右する色温度の使い分けや統一は、場所や用途に応じて意識することが大切である。
たとえば、活動的なエリアと比べたときに、歴史あるまちなみのエリアでより低い色温度を用いたほうが、情緒ある雰囲気を惹きたてることができる。また、樹木に対しては、緑のさわやかさを惹きたてるには高めの色温度、桜の華やかさや紅葉のあたたかい色味を感じさせるためには低めの色温度、といったように季節に応じて色温度を使い分けることも有効である。



色温度の考え方


自然光（太陽光）の色温度も1日の間に変わっていく


異なる色温度の照明が用いられ、統一感のない街路灯。


高い色温度の街路灯が連続し、水面にも映る。白々しく、冷たい印象を与える。


歴史のあるまちなみの明かりを、あたたかみのある低い色温度で統一した例。


足元の照明に加え、樹木などライトアップの色温度も統一されている事例。

5. 高い演色性

まちの表情を夜にも豊かに見せる

赤い花を白熱電球で照らした場合は鮮やかな赤色に見えても、ナトリウム灯の下で見ると、赤色ではなく枯れたような灰色に見える。このような、光源による色の見え方（再現性）の違いを評価する指標が演色性である。光の基準とされるのは太陽光や白熱電球の光で、これらの光に照らされた見え方に近いほど演色性の数値が高く、自然な色味に見えているということになる。一般的に、Ra80 以上の光であれば実用的に色彩を判断できるとされる。
市内でも多く見られるナトリウム灯や水銀灯は、演色性が低いものが多く、これらの光に照らされることで夜の景色が色あせて見えてしまう。演色性に配慮して照明器具を選定することで、まちなみ、緑、人々の表情といったあらゆるものを色彩豊かに見せることができる。



演色性の違いのイメージ（左は Ra90、右は Ra75 の光源）


演色性の低い水銀灯の例。陰鬱で緑がかった印象の空間になる。


演色性の低いナトリウムランプの例。とくに樹木や植栽の緑が色あせて見える。


演色性の高い光源によってライトアップされた樹木。


演色性の高い光源によってライトアップされた建物と植栽。

6. 光害への配慮

自然の暗さを尊重し、環境や夜空を守る

これからの都市照明においては、地球環境に優しいか、無駄な光や障害となる光はないか、省エネを十分考慮しているか、というような、未来への持続性を見据えた照明計画が求められている。LED は高い効率性を持つ省エネ光源ではあるものの、その効率の良さに甘んじて必要以上に過剰な光を発することは望ましくない。無駄な光を周囲に放つことは、上空まで漏れた光が星空を見えにくくしてしまったり、自然環境や周辺の居住環境に悪影響を及ぼすなどの光害（ひかりがい）の原因になる。
中心市街地にありながらも豊かな自然が残されている環境を守り、自然界の夜を尊重できるように、環境と光害に配慮した照明器具の選定や運用を行うことが必要である。



必要なところだけを照らすように配光制御された照明器具を選定することで、夜空や周囲の住宅に無駄な光を発することなく歩行空間を照らすことができる。

発光型



全体が発光する灯具形式。見た目の明るさ感を演出したり、動線上の誘導効果も合わせ持っている。
全方位に光を発するため、グレアの原因となりやすく、輝度が強くなりすぎないような配慮が必要。
暗い場所や住宅地付近での設置を検討する際は、製品の配光を確認のうえ、灯具の高さや光源 W 数の選択も慎重に行うことが求められる。

笠型



笠のある形状で、上方への光束が抑制された灯具形式。発光型と同様に、明るさ感や誘導効果を与えることもできる。
夜空への影響は抑えられるが、光源や発光面が歩行者からは目に入りやすいため、輝度が強くなりすぎないような配慮が必要。灯具の高さや光源 W 数の選択も慎重に行うことが求められる。

セミカットオフ型



反射板や笠などによって、上方に光が発されないよう配光制御された灯具形式。比較的、グレアに配慮がされており、車道等においては均斉度の確保も計画しやすい。
W 数の大きい光源を選択すると、グレアが増すことがある。現場周辺の状況（交通状況、地域特性）を考慮しながら、灯具仕様や配置間隔を計画することが望ましい。

カットオフ型

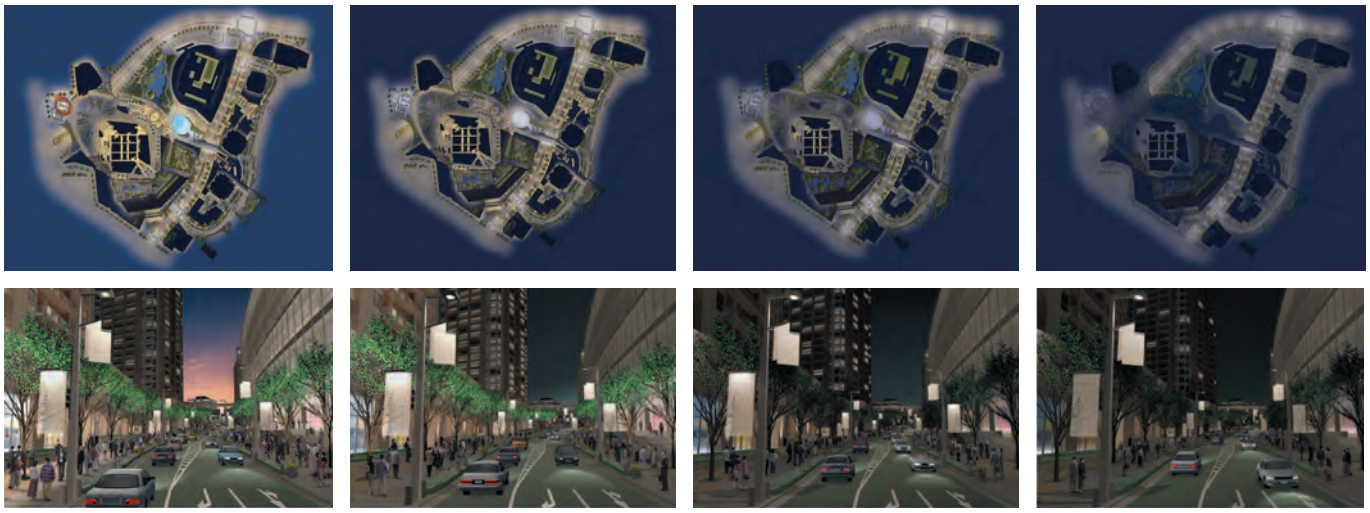


反射板や笠などによって、効率よく下方のみを照らすよう配光制御された灯具形式。省エネルギー効率とグレアレス性能に優れる。
効率的な均斉度確保という点ではセミカットオフ形より劣るため、車道等では採用が難しいこともあるが、意図したところだけを照らせるため、周辺環境に調和した照明計画を行うことができる。

7. 光のオペレーション

時間帯や季節に応じて光が変化する

オペレーションとは「操作･運用」という意味の言葉。自然光が季節や時間によって表情を変えるように、人工光に対しても緩やかで上品な光の変化を計画し、適切に操作することで、時間のうつろいを感じられる光環境が生まれる。一日の間の変化だけでなく、四季折々に移ろうまちなみに合わせて、桜や新緑、城跡の蓮、紅葉や祭りなど、季節に応じた演出も積極的に導入することで、より表情豊かな夜景を楽しむことができる。
また、一晩中ずっと照明を点けておくことは、エネルギーの無駄遣いのみならず、夜間の生活環境や生態系に対して悪影響を及ぼす原因になるため、必要な時間帯と用途に合わせたライトダウン（減灯）を意識することもオペレーションの重要な役割となる。



街区全体の時間に応じたライトダウンを計画したイメージ図。



四季を感じさせる照明演出の例。

４．より魅力的な夜間景観のために

4-1. 水辺景観エリアの夜景のキーワード

水辺景観エリアにおける課題点を改善し、
「大切にすべき光のルール」にもとづき夜間景観を形づくることで、
訪れる人々が鹿児島市ならではの憩いの空間を堪能できるように、
３つのキーワードを定める

「 にぎわいと憩い 」

…夜間も安心して訪れたくなるような、憩いの空間にふさわしい光環境を整える
…夜の回遊性を高め、鹿児島中央駅地区からいづろ・天文館地区まで
街をつなげるにぎわいを創出する

「 かがやく水辺 」

…水面への映り込みによって感じられるひろがりや、対岸や橋からの見え方を考慮し、
流れる川面のゆらぎや水のきらめきを存分に感じられるような
甲突川の水辺ならではのかがやく夜景をつくる

「 ふるさとの彩り 」

…ふるさとの歴史を感じられるさまざまな史跡と、自然を感じられる緑地帯とが
共存しているエリアの豊かさを夜間にも彩りをもって感じられるように、
各所の個性が生きるようなあかりを計画する

4-1. 水辺景観エリアの夜景のキーワード

「にぎわいと憩い」

…夜間も安心して訪れたくなるような、憩いの空間にふさわしい光環境を整える
…夜の回遊性を高め、鹿児島中央駅地区からいづろ・天文館地区まで
　街をつなげるにぎわいを創出する

水辺景観エリアは、甲突川沿いに豊かな緑地帯が続く心地よい空間として、市民の憩いの場となっているが、
夜には、不安感を覚える暗さや、グレアを発するまぶしい明るさなどによって、そのポテンシャルが活かされていない。
鹿児島らしいゆったりとした夜の時間を楽しむために、夜にも安心して訪れることができる光環境を整えながら、
憩いの場・にぎわいの拠点としての心地よい滞留空間をこのエリアに整備していくことが重要である。

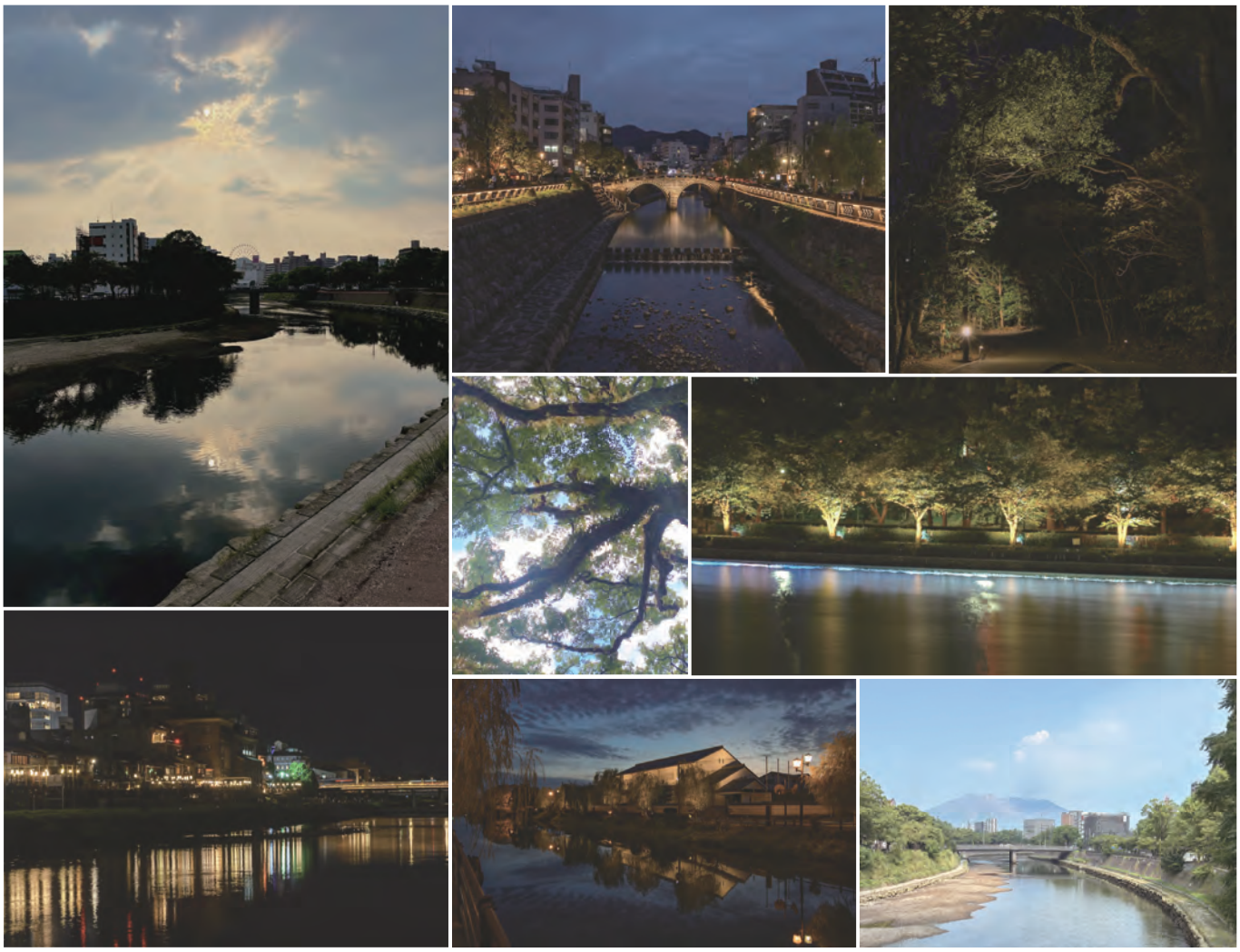


4-1. 水辺景観エリアの夜景のキーワード

「かがやく水辺」

…水面への映り込みによって感じられるひろがりや、対岸や橋からの見え方を考慮し、
流れる川面のゆらぎや水のきらめきを存分に感じられるような
甲突川の水辺ならではのかがやく夜景をつくる

市内の中心において豊かな水辺空間が広がっていることは、都市景観として非常に魅力的な環境である。
夜の甲突川を臨む景観が、桜島が見える昼間と同様の、鹿児島市を代表する夜景のひとつになるように、
川沿いの広々とした空間を活かした美しい夜景を甲突川に生み出す。
また、元来、自然界の夜とは、月明りや星明りを惹きたてるような心地よい闇が満ちているものである。
ただ明るく照らし出すだけではない、自然のために優しい照明を考えることで、生態系や光害に配慮する。



4-1. 水辺景観エリアの夜景のキーワード

「ふるさとの彩り」

…ふるさとの歴史を感じられるさまざまな史跡と、自然を感じられる緑地帯とが
共存しているエリアの豊かさを夜間にも彩りをもって感じられるように、
各所の個性が生きるようなあかりを計画する

緑地帯の合間にさまざまな史跡が点在する水辺景観エリアでは、それぞれの対象物が散発的に照らされていると、アンバランスな印象を受ける。ランドマークとなる史跡やモニュメントと、それらをつなぐ街路空間や周囲の樹林とを一体的に考えた整備によって、各所の個性を活かしながらも連続性のある夜間景観をつくることをめざす。鹿児島の歴史や自然が彩るさまざまな表情が、互いに惹きたて合うようなあかりを計画する。





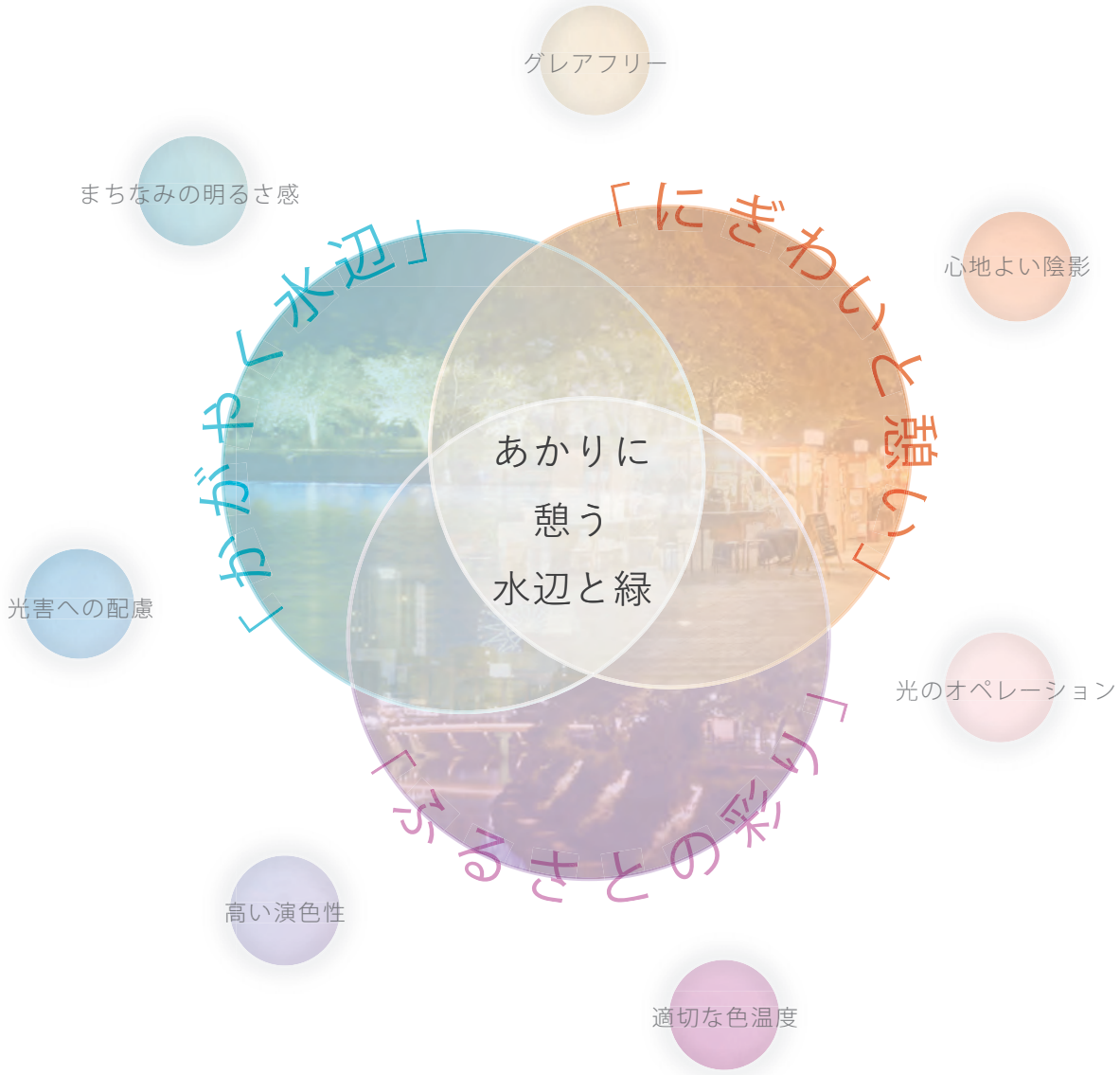





4-2. 水辺景観エリアの夜間景観形成の目標

- あかりに憩う水辺と緑 -

川沿いの各所で局所的に整備が行われている夜間景観に対し、統一感があり周辺環境にも配慮したあかりによって点と点をつなぐような連続性をもたせていくことで、夜にも安心して散策することができる市民の憩いの場を創出し、緑豊かな親水空間ならではの心地よさとにぎわいのある美しい夜間景観とすることを目指す。

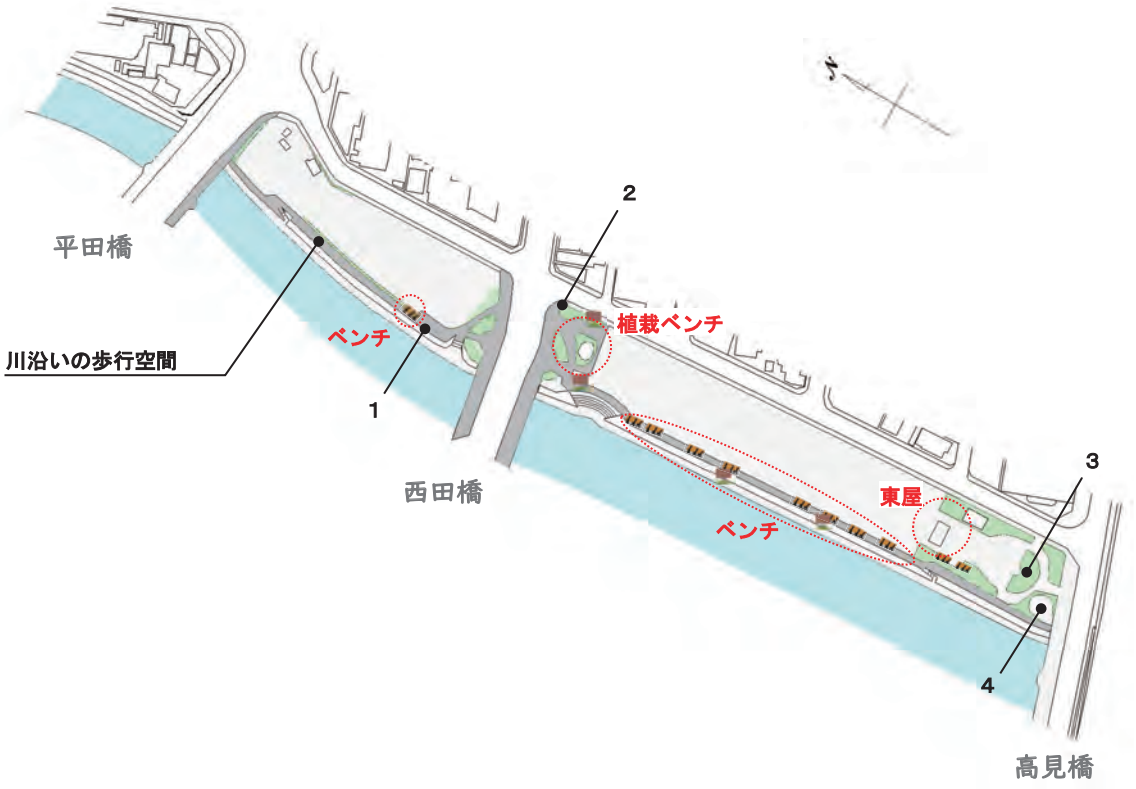


地域にとって身近で愛着のある景観を、夜間も魅力的で歩きたくなる空間として創出することで、そこに暮らす人々の生活を豊かにし、訪れる人々にとっても鹿児島の歴史や自然などの魅力を堪能することができるエリアとするため、光のルールを基盤とする「にぎわいと憩い」、「かがやく水辺」、「ふるさとの彩り」の３つのキーワードが交わる先に「あかりに憩う水辺と緑」を目標として定める。

５．整備イメージ

5-1. 整備の基本的な考え方

現状調査から見えてきた課題点を改善し、水辺景観エリアの夜間景観形成目標を実現するため、
大切にすべき光のルールに配慮した統一感のあるあかりによる具体的な整備イメージを検討する。
本エリアの現状の史跡・施設及び滞留空間は以下のとおりである。

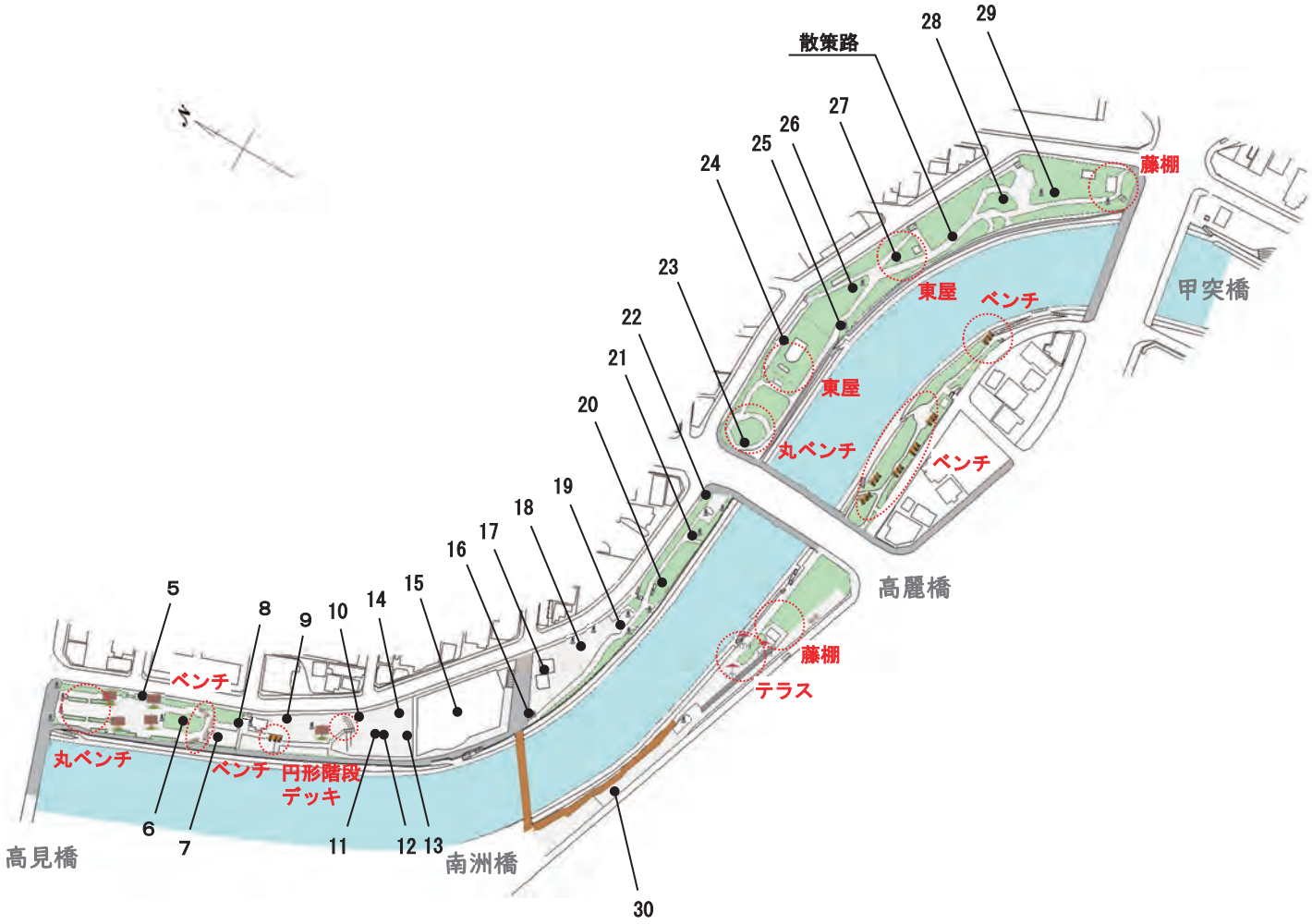


史跡・施設 一覧

1．8・6 豪雨災害之碑
2．緑の翼
3．ライオン像
4．大久保利通像
5．萩原小路石碑
6．戦災復興記念碑
7. 二松学舎跡碑
8. 二本松馬場石碑
9．時を刻む語らい広場
10．猫の薬師小路石碑
11．大久保利通生い立ちの地
12．牧野伸顕誕生地
13．共建碑
14．伊東元帥手植記念碑
15．維新ふるさと館
16．山之口馬場石碑
17．武家屋敷
18．堀井鶴畔書碑
19．いろは歌の広場
20．木島冷明歌碑
21．円形広場
22．入口広場（武家門）
23．シンボルゲート
24．日高山伏物語の碑
25．東郷久義歌碑
26．牛島満大将生い立ちの碑
27．佐多愛彦顕彰碑
28．帽子の像
29．伴彦四郎先生頌徳碑
30．高島鞆之助誕生地

滞留空間

5-1. 整備の基本的な考え方





「川沿いの歩行空間」



「滞留空間」



「散策路」



「史跡・施設」

5-2.「大切にすべき光のルール」の適用

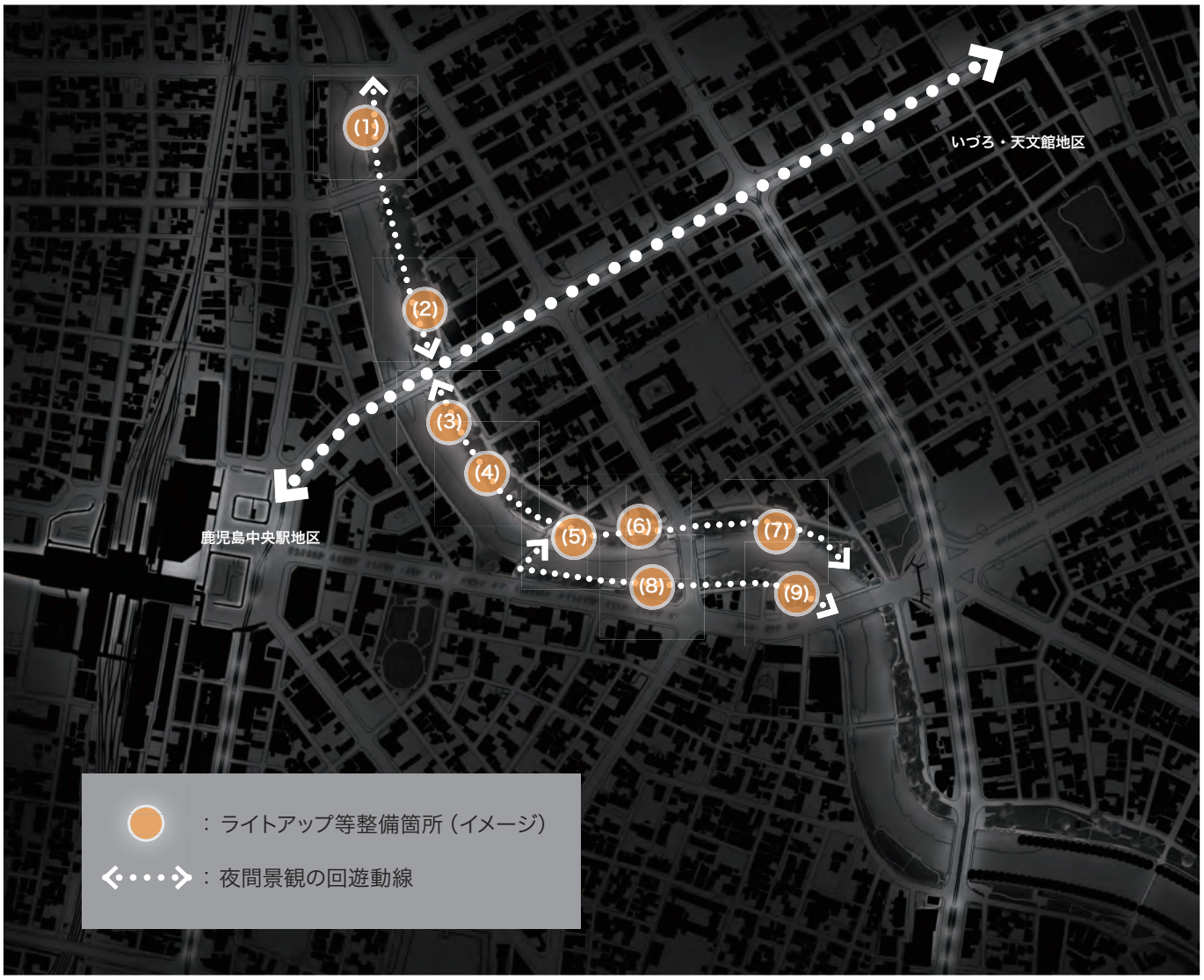
水辺景観エリアにおいては、
「大切にすべき光のルール」を、以下のように適用していく

・心地よい陰影	川沿いの歩道で 1 ～ 10 ルクス前後 広場、緑地帯内の散策路、園路などで 0.5 ～ 10 ルクス前後 ただし明るさ感や周辺環境も考慮して計画する
・まちなみの明るさ感	史跡や銅像のライトアップ、樹木のライトアップを、適切に行う すべての対象を一律に照らす必要はなく、周辺環境を考慮して計画する
・グレアフリー	街路灯を、グレアに配慮のある仕様とする （カットオフ型の器具の選定､輝度の抑えられたランプへの変更など） 川面への映り込みも考慮した配光や輝度とする
・適切な色温度	憩いの場にふさわしいあたたかみのある光環境とするため、 2400 ～ 3000K 程度の低い色温度での統一を基準とする 樹木の緑を惹きたてるなどの理由がある場合、 部分的に少し高めの色温度（3500K 程度）の使用も検討する
・高い演色性	Ra80 以上を基本とする
・光害への配慮	照射対象以外への不要な光漏れがないように、 照明器具の仕様（グレアカットフードや適切な配光など）や 設置時の納まりに配慮する
・光のオペレーション	時間帯によるライトダウンを行い、環境への影響や省エネに配慮する 季節に応じたライトアップや、 イベントに応じたオペレーションを検討する

5-3. 整備イメージ作成箇所

「鹿児島中央駅地区」と「いづろ・天文館地区」間の回遊性のさらなる向上を図るため、両地区の間に位置する本エリア内にも回遊動線を設定し、夜間においても、歩いて楽しめるまちづくりを推進する。
本エリアの特徴を踏まえ、「川沿いの歩行空間」、「滞留空間」、「散策路」、「史跡・施設」の４つの類型を設定し、
本エリアの代表的な９箇所について、具体的な整備イメージを作成する。

		ライトアップ等整備箇所（イメージ）								
		（1）川沿いの歩道	（2）市民広場	（3）維新ふるさとの道①	（4）維新ふるさとの道②	（5）維新ふるさとの道③	（6）維新ふるさとの道④	（7）維新ドラマの道	（8）右岸緑地①	（9）右岸緑地②
対応する類型	「川沿いの歩行空間」	○		○		○	○	○	○	
	「滞留空間」		○	○					○	
	「散策路」				○		○	○		○
	「史跡・施設」					○	○			



（1）川沿いの歩道

「川沿いの歩行空間」の類型

現状（昼）



甲突川に沿って整備されている歩道。街路樹の桜と水辺の景観を楽しみながら歩ける空間が続く。

現状（夜）



歩道のための照明は、強いグレアを発する街路灯のみで、街路樹の存在や川沿いの心地よさといった景観のポテンシャルを活かせていない照明手法となっている。

（1）川沿いの歩道

「川沿いの歩行空間」の類型

整備イメージ



甲突川沿いの歩道における基準の考え方として、ポール灯による照明手法ではなく、フットライト用照明と樹木アップライト用照明という二種類の機能を内蔵したボラード照明を配置する。
歩道にリズミカルな光だまりをつくるフットライトによって、足元における機能的な照度を確保しながら、歩いていきたくなるような連続性をもたせる。また、川沿いの樹木をアップライトすることで、視界における明るさ感を確保し、心地よく美しい景観をつくるとともに、桜など季節を感じさせる樹木の表情を見せるようにする。
堅牢なボラードに灯具を一体化させて内蔵することで、通行量の多い場所における灯具の破損や劣化にも配慮する。



フットライトとアップライトが一体化されたボラード照明の事例。
甲突川らしさを感じさせる意匠にすることも検討する。



光の要素の断面的なイメージ

（2）市民広場

「滞留空間（東屋）」の類型

現状（昼）



憩いの空間としてテーブルやベンチも置かれている藤棚や東屋。その先には広々とした市民広場が続く。

現状（夜）



夜には周辺の街路灯からの光が少し届くのみで、東屋や藤棚があることによる憩いの印象は感じにくい。川沿いの街路灯は遠くてもまぶしい。

（2）市民広場

「滞留空間（東屋）」の類型

整備イメージ



人だまりとなるような明るさをつくるため、東屋や藤棚は小型のスポットライトによって柱から天井面へのアップライトを行い、滞留空間を包むようなやわらかい光が感じられるようにする。テーブルには、小型の行燈のような照明器具を設置する。
広々とした空間の中央にある植栽帯には、下方の植栽のみを照らす配光のボラード照明を設置し、夜にも緑を感じさせる。
奥につながる市民広場において、「（1）川沿いの歩道」に示した考え方でポール灯のグレアがなくなることにより、広場を眺めたときも目に優しい景色となる。



東屋の天井面を、周囲の柱につけた小型スポットライトによってアップライトしている事例。包まれるような明るさ感が生まれる。

（3）維新ふるさとの道①

「滞留空間（緑地帯）」の類型＋「川沿いの歩行空間」の類型

現状（昼）



高見橋の南側は、維新ふるさと館へ続く緑地帯の入口として、人々を迎える滞留空間となっている。

現状（夜）



夜には屋台の明かりがともり、にぎわい感が生まれていたが、樹木の影が暗がりになっていたり、川沿いの歩道は暗かったりと、アンバランスな印象。

（3）維新ふるさとの道①

「滞留空間（緑地帯）」の類型＋「川沿いの歩行空間」の類型

整備イメージ



人々が憩う空間としてのあたたかみやにぎわい感を演出するため、ベンチ下の間接照明や、やわらかく発光する行燈照明を適切に配置する。頭上の樹影に対してはところどころでアップライトを設ける。
川沿いの歩道は、（1）のとおり、ボラード照明によるフットライトと樹木アップライトを連続して配置する。
フットライトによる規則的な光だまりと、行燈照明やベンチ下照明による有機的に散らばった明るさ感とで、歩行空間と滞留空間のそれぞれに対して雰囲気の合った光環境をつくり、自然と訪れる人々の流れが生まれるようにする。



間接照明が設けられたベンチに集う人々の様子。



ベンチまわりの明かりや行燈照明の明るさ感、樹木のアップライトによって、散策しながら滞留できる心地よい空間となっている事例。

（4）維新ふるさとの道②

「散策路」の類型

現状（昼）



豊かな緑を感じながら散歩ができる散策路。木々の合間には、ところどころでベンチが置かれている。

現状（夜）



樹木が影になっており、豊かな緑を感じられたはずの空間が闇に変わっていて、昼間のような心地よさは感じにくい。

（4）維新ふるさとの道②

「散策路」の類型

整備イメージ



樹林のあいだの散策路が続くエリアでは、滞留空間として人々を呼び込む高見橋側のエリアに対し、ベンチ下照明や行燈照明といった同じ光の要素を用いながらも、光の配置や形状を動線に沿った規則的なものに変えていくことで、歩行の誘導性を高める。
また、樹種が桜となるため、四季の移ろいを見せられるような樹木のライトアップをより積極的に行う。
既存でもライトアップが行われている戦災復興記念碑などのモニュメントは、照明器具の適切な保守管理や更新によって、木立の合間からも視線を惹きつける対象として見えてくることが望ましい。



動線の先に行燈照明があることにより、誘導性を感じさせる事例。



木立の中にあるアートワークがライトアップされ、樹木とともに、光で浮かび上がっている事例。

（5）維新ふるさとの道③

「川沿いの歩行空間」の類型＋「史跡・施設」の類型

現状（昼）



川沿いの空間が開けて心地よく、武家屋敷のような史跡も楽しみながら散策できる。

現状（夜）



街路灯のグレアがまぶしく、輝度の対比により周囲が暗く感じられる。武家屋敷周辺は、暗がりとなって存在がわからない。

（5）維新ふるさとの道③

「川沿いの歩行空間」の類型＋「史跡・施設」の類型

整備イメージ



川沿いの歩道は、（1）のとおり、ボラード照明によるフットライトと樹木アップライトを連続して配置する。
南洲橋周囲のように、歩道が開けて樹木の間隔が空くエリアに対しては、フットライトの間隔が空きすぎることのないように、アップライト用の灯具が内蔵されていない「フットライトのみ」のパターンのボラード照明もまじえて設置し、川沿いに続く光だまりのリズム感が損なわれないようにする。南洲橋や案内板への既存の照明は、照明器具の適切な保守管理によって、光の品質を保つ。
武家屋敷は、優しい光でライトアップを行うことで、夜にも史跡の存在感を感じさせ、景色に奥行きを与える。屋敷森の奥に明かりが覗いているようなイメージの、優しく、華美すぎないライトアップとする。



まちなかにおける史跡の建物をライトアップし、木立のシルエットの奥に存在感を浮かび上がらせている事例。



川沿いのリズミカルな光や対岸の映り込みの先に、やわらかい光で浮かび上がるアートワークが垣間見え、奥行き感のある景色となっている事例。

（6）維新ふるさとの道④

「散策路」の類型＋「史跡・施設」の類型＋「川沿いの歩行空間」の類型

現状（昼）



明治維新の歴史にまつわるモニュメントや史跡が点在し、歩く人を楽しませるような散策路が続く。

現状（夜）

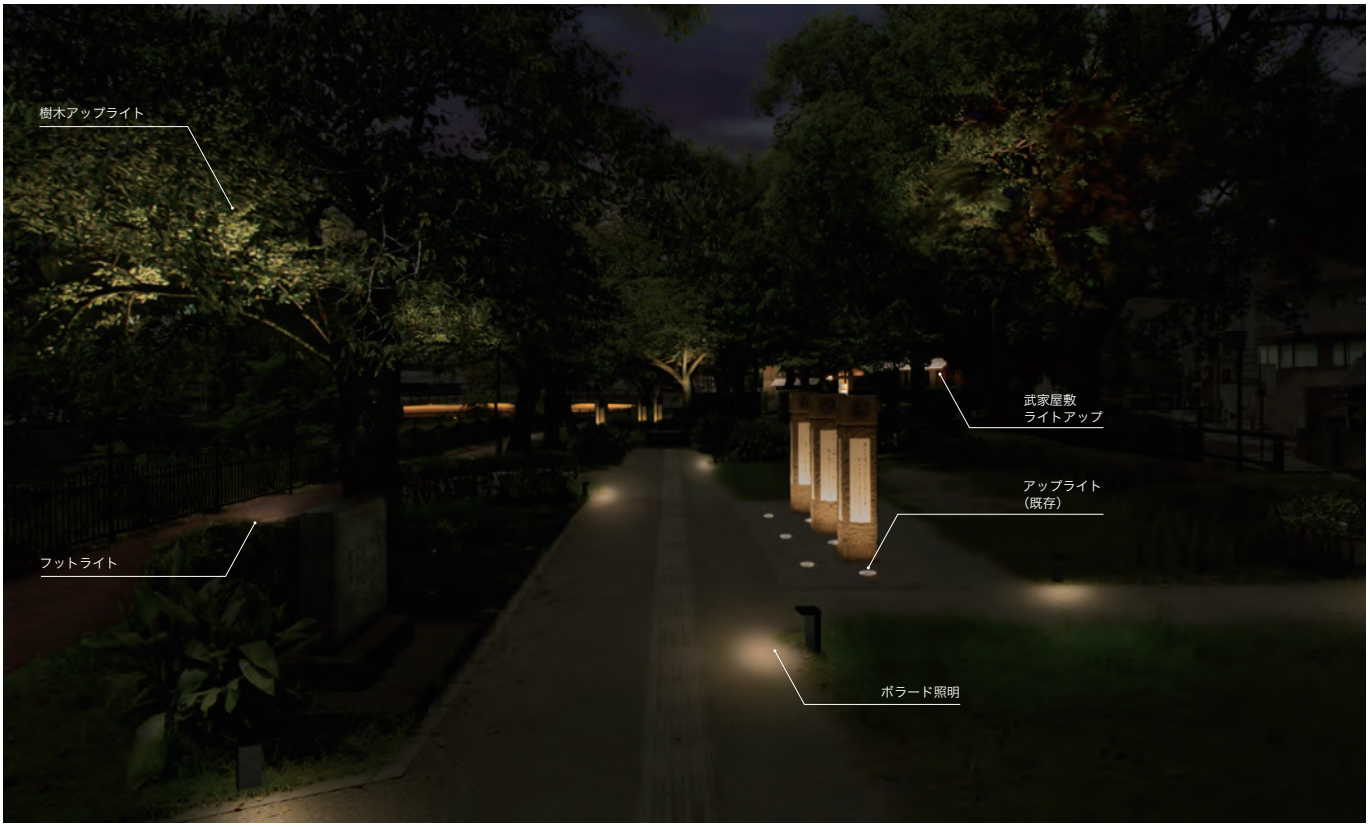


照らされているところと暗がりになっているところがあり、アンバランスな印象を受ける。

（6）維新ふるさとの道④

「散策路」の類型＋「史跡・施設」の類型＋「川沿いの歩行空間」の類型

整備イメージ



現状行われているライトアップは、適切な保守管理と更新を行ったうえで、明るさ感を生みだす光の要素として活用する。これらのライトアップの間をつなぐように、足元に光を落とすボラード照明を動線に沿って設けることで、不要な暗がりをなくし、安心して歩ける機能的な照度を確保する。モニュメントのライトアップだけでは視界の明るさ感が不足するところについては、ところどころで樹木をライトアップする。

川沿いの歩道は、（1）のとおり、ボラード照明によるフットライトと樹木アップライトを連続して配置する。

直線的で規則的なリズムがある川沿いの光に対し、照らされたモニュメントや千鳥に配置されるボラード照明による散策路の光が、より遊び心のある印象を与えるように工夫する。



親密なスケール感の散策路の横に、広々とした道路が隣り合っている空間の事例。千鳥配置でやわらかい光を投げかける照明と、規則的な配置で道路を広く照らす照明との対比で、光による性格付けを行っている。



足元を照らすボラード照明と、ところどころでライトアップされた樹木による明るさ感によって人々を誘導する散策路の事例。

（7）維新ドラマの道

「川沿いの歩行空間」の類型＋「散策路」の類型

現状（昼）



整備された歩道が続く横に、遊具や銅像、歴史をアートにした電光掲示板が並ぶ。

現状（夜）



維新ドラマの電光掲示板は、適切な輝度感で、散策路の奥行きや明るさ感を演出している。ただ、他に光っている景観要素がまぶしい街路灯のみのため、心地よい歩行空間とは言い難い。

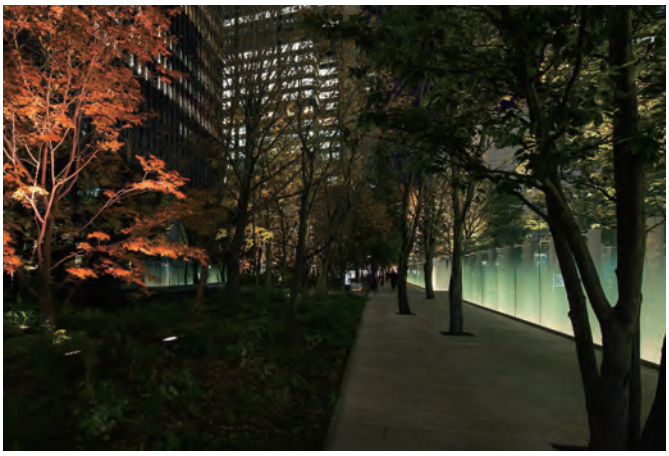
（7）維新ドラマの道

「川沿いの歩行空間」の類型＋「散策路」の類型

整備イメージ



川沿いの歩道は、（1）のとおり、ボラード照明によるフットライトと樹木アップライトを連続して配置する。
「フットライトのみ」のパターンのボラード照明もまじえて設置し、川沿いに続く光だまりのリズム感が損なわれないようにする。
電光掲示板は現状の適切な輝度感を保ちながら、過度にまぶしくなることのないよう、保守管理されることが望ましい。
また、電光掲示板に表示されるドラマの背景として、公園側の樹木も適度にアップライトを行い、より明るさ感のある空間にする。



発光している大きなガラス面と、アップライトされている樹木が、重層的に明るさ感を形成している歩行空間の事例。



川沿いに並ぶフットライトのリズム感が、水面に映り込む光と呼応している。

（8）右岸緑地①

「滞留空間（テラス）」の類型＋「川沿いの歩行空間」の類型

現状（昼）



甲突川を臨む、開放的な心地よいテラス。

現状（夜）

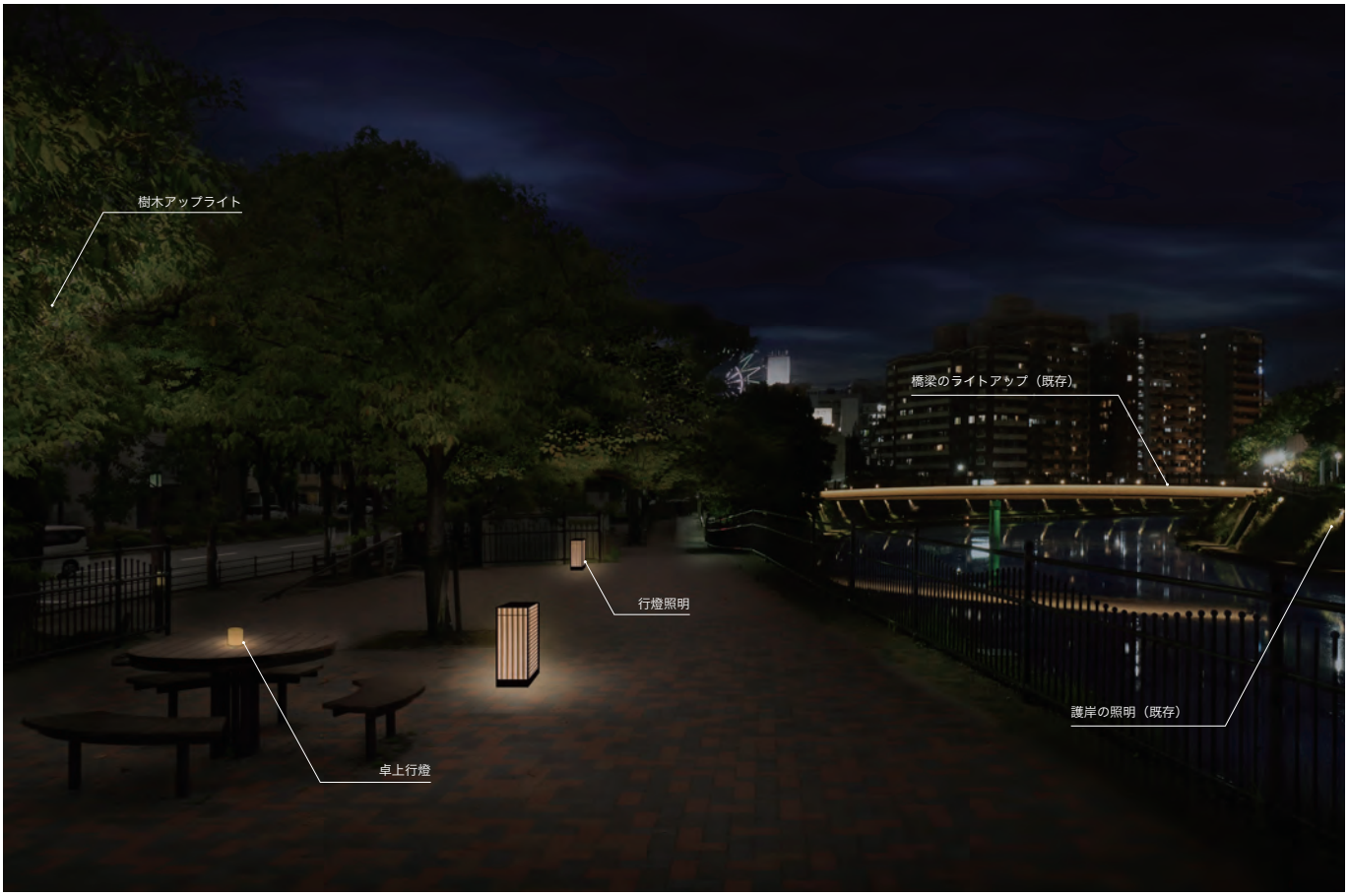


ポール灯は歩行者の通るところを照らしているが、テーブルまわりには光が届いておらず、周囲は非常に暗い。滞留空間としてバランスが悪く感じられる。

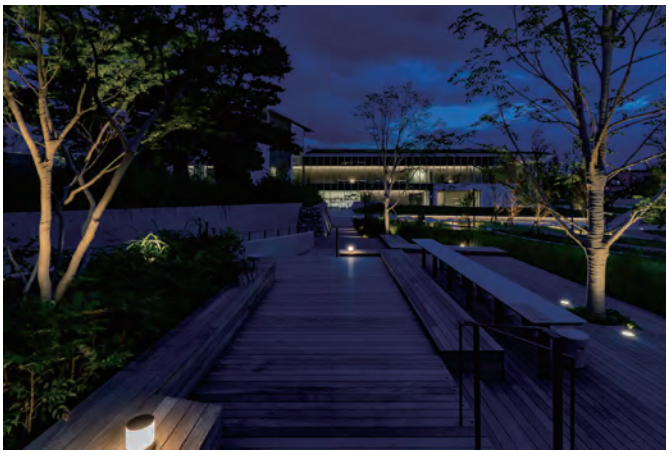
（8）右岸緑地①

「滞留空間（テラス）」の類型＋「川沿いの歩行空間」の類型

整備イメージ



このテラスは、川沿いに通り抜ける歩行空間としてよりも滞留空間としての性格が強いと考えられるため、川に沿って並ぶポール灯による街路のような照明ではなく、人だまりに寄り添うようなやわらかい明かりによる照明を配置する。
行燈照明のように求心性のあるやわらかい明かりを、人だまりができやすいテーブルやベンチの近くに配置することで、人々が心地よく夜のテラスを楽しめるようなあたたかさを与える。手元の明かりとして、テーブル上への明かりの設置も検討する。
テラスに滞在する人々が眺める景色を美しいものとするには、対岸の川沿いにおける樹木アップライトの整備や、ポール灯からボラード照明に変更することによるグレアの排除、既設ライトアップに対する適切な保守管理、などが重要である。



テラスに行燈照明が置かれ、あたたかい明かりでよりどころになっている事例。アップライトされた樹木による明るさ感も、空間を包み込んでいる。



ライトアップされた樹木や護岸、橋梁が、川面の映り込みを介してつながり、水辺の美しい景観をつくっている事例。

（9）右岸緑地②

「散策路」の類型

現状（昼）



右岸緑地は川に沿って少し高台になっていて、公園のような散策路が続く。ベンチが憩いの場となっていたり、両岸の木々が季節ごとの表情を見せる。

現状（夜）



まぶしい街路灯の明かりだけでは、歩行の頼りになるような明るさ感や光だまりがなく、不安を感じる。対岸の景色も、点々と川に映り込む街路灯のみ。

（9）右岸緑地②

「散策路」の類型

整備イメージ



右岸緑地では、左岸側のような川に沿った直線的な歩道がなく、木々の間を抜ける散策路が川に面して続いている。隣接する道路と緑地帯との高低差もあることから、緑に囲まれている印象がより強くなる。
そのような散策路の性質と、木々の間に見通せる対岸の樹木や川面もより感じられるようにするため、行燈照明のように光のかたちを直接見せる手法ではなく、樹木のライトアップで照らされた木々の存在を主体として、心地よい明るさ感をつくっていく。
特に桜の樹に対しては、四季の移ろいを見せられるようなライトアップを積極的に行う。
足元には、フットライトやベンチ下照明によって、曲線的に続く歩道に呼応したリズミカルな明るさを与え、歩行のための安全性を確保する。



ベンチ下照明と樹木アップライトによる事例。すべての樹木ではなくところどころの木をバランスよく照らすことで、散策路らしい心地よさのある陰影を生み出している。



桜と護岸のライトアップの事例。夜間には、桜が川面に映り込む姿が、照明によって浮かび上がり、水辺ならではの印象的な春の景観となる。

【参考】
今後、水辺景観エリアの区域拡大について検討を行う際には、周辺に位置する史跡や公園などの公共施設、
甲突川下流側の緑地帯なども含め、回遊動線等にも配慮しながら、
夜間景観のさらなる充実を図ることが想定される。



旧鹿児島市交通局新武之橋変電所の整備イメージ図
（※史跡等の整備事例（参考））

お問い合わせ先

鹿児島市 建設局 都市計画部 都市景観課
〒892-8677　鹿児島市山下町 11 番 1 号

ＴＥＬ：０９９-２１６−１４２５
ＦＡＸ：０９９-２１６−１３９８